

冬春いちごの主産地での周年供給

— 栃木県の大規模農家の事例 —

研究員 趙 玉亮

生鮮いちごは冬春期だけでなく、ケーキなどの業務用を中心に年間を通して需要がある。夏秋いちごの国内増産が期待されるものの、涼しい生育環境を好むいちごの夏秋栽培は、冬春と異なり、夏の高温・長日条件下による受精不良、病虫害が発生しやすいなどの課題がある。このため、夏秋いちごは北海道、青森、長野、宮城など冷涼な地域に生産が集中している。^(注1)

一方、旺盛な需要の下、夏秋栽培に適する品種開発と高温対策技術により、冬春いちごの主産地でも、夏秋栽培が増え始めている。そこで、いちごの周年供給を行う野口いちご園(栃木県真岡市・非法人)を紹介したい。

1 経営概要と冬春いちごの生産状況

野口いちご園の経営面積は冬春が1ha、夏秋が10aである。いちご栽培は労働集約型で、同園では労働力として、家族4人(経営者夫婦・父母)と外国人実習生6人のほか、冬春いちごの収穫を行うパートを3人雇用している。

冬春いちごの栽培は30年前から始めた。現在の主な品種はとちおとめで、同園では9月中旬に定植し、11月中旬から翌年の5月まで収穫している。栽培歴が長く技術も高いため、反収は5トンの水準に達し、安定している。

2 夏秋生産の経緯と取組み

一方、夏秋栽培を開始したのは2011年であ

る。「主産地として年間を通していちごを提供したい」という思いから、同年に県で夏秋どり品種「なつおとめ」が品種登録されたことを機に、地区内で最初に土耕による「なつおとめ」栽培を行った。

同園は夏秋いちごを3～4月に定植し、6～11月まで収穫している。冬春いちごは5月末に収穫作業が終了するため、10aの夏秋栽培は労働力には問題がない。

しかし、高温対策が難しく、夏場に収量が大きく落ち込むなど不安定であった。収量の向上と安定性確保に向け様々な試行栽培を行ったが、土耕での反収は2トン弱にとどまった。

状況が大きく変わったのは16年からである。技術視察会で高設栽培を見学し、作業姿勢の負担軽減や肥培管理の効率化などにメリットがあると感じ、同園は夏秋いちごの栽培方法を土耕から高設へと変更した。



9月初頭のハウス内の夏秋いちご(筆者撮影)

第1表 野口いちご園の生産と販売状況(2016年)

	栽培面積 (a)	栽培・収穫時期	反収 (トン/10a)	販売先と平均出荷価格 (kgあたり)	粗収益 (万円/10a)
冬春いちご (とちおとめ)	95	9月定植、11月半ば～ 翌年5月末まで収穫	5.0	JAに向け出荷、1,000円	500
夏秋いちご (なつおとめ)	10	3～4月定植、6月初頭 ～11月末まで収穫	2.8	生産量の9割は道の駅に向け出荷、2,000円 残りはホテルなどへ直接販売、2,800円	580

資料 野口いちご園への聞き取り調査に基づき作成
 (注) 冬春いちごの栽培面積は上記以外、5aのとちひめを栽培している。

また、高温対策は、遮光ネットの活用とハウスの裾・肩の両方換気のほか、地下水による培地冷却の独自工夫を行った。具体的には、一般に用いられるクラウン冷却^(注2)ではなく、高設栽培ベッドの中にパイプを埋め込み、地下水を通すことで栽培ベッド内の培土を冷却するようにした。夏場、朝7時から午後8時まで、パイプに地下水を通すことで、ハウス内の室温が35℃であっても、培地を22～23℃の低温に維持することができるようになった。

高設栽培や高温対策などが奏功し、腐敗果などのロスが大きく減り、反収は2トン弱から16年には2.8トンへと増加した。

3 夏秋いちごの販売と収益性

同園の冬春いちごの出荷は主にJA向けで、平均出荷価格は1,000円/kgである。それに対し、夏秋いちごは9割を近隣の道の駅に2,000円/kgで出荷。残りはホテルなど飲食店を中心に、2,800円/kgと高価格で販売している(第1表)。堅調な市場ニーズがあるものの、安定

供給ができない恐れがあるため、同園は安易な販路拡大は行っていない。

このように、高価格販売を実現しつつ、栽培技術の工夫などの効果もあり、単位面積で見ると夏秋は冬春と同等の粗収益を実現している。これまで夏場の現金収入がほとんどないなか、実習生の労賃負担をしていたが、夏秋いちごの収入が得られたことで資金繰りも改善している。

今後、収量の一層の安定化に向け、栽培技術の改善を図りつつ、夏秋いちごの栽培拡大を考えている。既存労働力の余力を勘案すれば、冬春の育苗作業などを行いながら、夏秋の栽培面積を30aまで拡大できる見通しである。

4 夏秋いちごの普及について

冬春いちご主産地での夏秋栽培は、効果的な高温対策などによって、今後普及していくものと考えられる。

本事例のように、実習生などの常雇用を導入している大規模経営体にとって、夏秋いちごの栽培は労働力の効率的活用による経営の安定化を図るという点で大きな意義がある。

(チョウ ギョクリョウ)

(注1) 青森県農林水産部農産園芸課(2010)「夏秋いちごの産地づくりに向けて」『野菜情報』6月号、農畜産業振興機構

(注2) 培地の上に敷設したチューブに冷水を流し、いちごのクラウン部(株元)だけを直接冷やす技術。